

憲法を考える映画の会 あとおいニュース

第3号 2013年8月1日発行

憲法を考える映画の会について

「憲法を考える映画の会」は、立憲主義を否定し、憲法改悪を企図する政党や勢力に反対し、日本国憲法を自分たちのものとするために憲法に関連した映画を見て、意見を出し合い話し合う機会をつくろうとしたものです。2013年春から月1回のペースで開いています。同じような映画の会があちこち広がっていくことをめざしています。

全8ページ

第5回 憲法を考える映画の会は 劇映画『日本の青空』を いっしょに見て、考え、話します。

参議院議員選挙は私たちがめざしたのものとは違った残念な結果でした。でもこれからが勝負だと思えます。日本国憲法に対する知識と認識を深め、さらにこの憲法を自分たちのものにしていきたいと思えます。

私たちは4月『戦争をしない国日本』、6月『映画 日本国憲法』、7月『日本国憲法誕生』と日本国憲法の成立過程とその後を描いた映画を見て、憲法の原点について認識を深めてきました。その中で戦後すぐに民間人らによる「憲法研究会」が作成した憲法草案があり、それがGHQ憲法草案の手本になったと知りました。今回の映画『日本の青空』はこの憲法研究会草案作成の中心になった憲法学者鈴木安蔵を描いた劇映画です。自民党はじめ戦後、改憲を唱える組織は一貫して「押しつけ憲法だから自分たちのものを」と主張してきました。しかし、憲法成立過程の事実と真実をいくつかの側面からとらえることを通して、日本国憲法こそ、当時、戦争への反省をもとに戦争を放棄し、国民主権、民主主義への道筋、自分たちの望む社会、政治を示した「自分たちのもの」であったことに学び、考えていきたいと思えます。



第5回 憲法を考える映画の会 ご案内

- 映画 「日本の青空」
(120分)
- 日時 2013年8月10日(土)
14時～17時
- 会場 婦選会館
2階会議室
東京都渋谷区代々木
2-21-11
- 参加費 基本的に無料上映会

(この映画は無料上映会の
目的で貸し出されています)

戦争を考える映画の会

〒185-0024 東京都国分寺市泉町 3-5-6-303

TEL : 042-406-0502

E-mail : hanasaki33@me.com

検索 → 憲法を考える映画の会

第3回 憲法を考える映画の会は

『映画 日本国憲法』を見て考えました。

報告

今回の「映画 日本国憲法」を監督したジャン・ユンカーマンさんに映画の会に来ていただきました。みんなでの話し合いの後、ユンカーマン監督にお話しいただきましたが、その内容は、この「映画の会」を催す意義をも示唆するお話でした。そこでそのお話のはじめの部分と結びの部分を紹介させていただきます。(その他の部分は7ページ～8ページに掲載)

ユンカーマンさんの話(1)

【「映画の会」は民主主義の参加の形のひとつ】

5月3日の会の後にこの企画を聞き、いい企画だと思った。このようにとくに続けてやることで、いろんな素材があるので、いろんな角度から憲法の問題を考えるのはとてもよいことだと思った。(映画の感想など)皆さんの指摘したことはとても鋭い。「よく見ているな」と思いありがたい。

2回、3回と見る価値のある映画を作ろうと思っていた。

テーマというのは、奥深いものです。1回で全部評価できないところもあると思うし、映画だからと省略している所もある。明確に言わないで、このような話だろう、というところがいっぱいあるのだと思う。

僕たちがつくる映画というのは、やはりそういう形で、見ている人が参加しながら映画を見て解釈するというのが一つの参加の仕方だと思う。このような集まりがあって、その後に話し合いということも立派な民主主義の参加の一つだと僕は思うのです。

(この間のお話は、7ページ、8ページ目に掲載しています)

ユンカーマンさんの話(4)

【自民党改定案は民主主義の否定】

この映画ができた時は、9条がテーマなんですね。憲法が全体的話ではあるんだけど、9条が中心になっていただけで、今回は、今の自民党の改定案を見ると9条だけでなくやはり憲法自体、憲法、立憲主義というのを否定しようとしてるんです。それが本当に根本的には、民主主義を否定するということにつながっていくと思うんです。

そういう中では、さっき話したように市民が立ち上がって、自分の権利、自分の憲法を守っていくしかないと思うんです。やはりこういうような集まりが、20人、30人とか100人、200人とか、それを繰り返すしかないんじゃないでしょうか。あまりいっぺんに大勢の人達が参加するのではない、少しずつ少しずつひろがっていくことだと思うんです。とても大事なことだと思う。

後は、こういうような集まりに参加すると世の中を見る目が変わっていくということです。1時間、2時間位娯楽映画を見た後に世の中の見方があまり変わらないですけど、こういうような集まりでこういうような話し合いをすると世の中を見る目が変わっていくということです。

そういう意味では、最初に考えるよりも影響力がとても強いと思うんです。ひろがっていくことなんだから。そういう意味では、それが残ると思うんです。一遍やって、やりながらやり続けるなかで強くなっていく。民衆の力、民衆の発言力と判断力が強くなっていくんじゃないかな。これからまた続けることがすごく大事なことだと思います。

第3回憲法を考える映画の会

- 映画 「映画 日本国憲法」
- 日時 2013年6月15日(日)14時～
- 会場 婦選会館 2階会議室
- 参加者 28人



6月15日代々木の婦選会館で「憲法を考える映画の会」という集まりがあり、そこでジャン・ユンカーマン監督によるドキュメンタリー映画「日本国憲法」が上映された。ユンカーマン監督は憲法第9条に焦点を当てながら、戦後にこの憲法を作った人々がいかなる考えで作ったのか、またこの憲法が後にアジアや世界の人々にどう受け止められたのかを丹念に各地を訪問して取材している。証言者は歴史学者のジョン・ダワー、社会学者の日高六郎、政治学者のダグラス・ラミス、憲法を作成した一人のペアテ・シロタ・ゴードン、そして中国の班忠義と韓国のシン・ヘス、ハン・ホング、バイルートのジョゼフ・サマーハなど実に多岐にわたる。会場には監督のユンカーマン氏も訪れ、様々な観客の感想を聞いた後、自ら撮影にまつわるエピソードや思いを語った。(「映画の会」を紹介した日刊ベリタの記事[下記アドレス]より、続きもご覧ください)

<http://www.nikkanberita.com/read.cgi?id=201306151941556>

■第3回憲法を考える映画の会 映画の後の話し合い

映画「映画 日本国憲法」(分)を上映した後、その映画の感想をはじめとしておよそ1時間の話し合いの機会がもたれました。
第3回憲法を考える映画の会(6月15日)の映画の後の話し合い その1

●【憲法を守ろうというところから話を始められる】

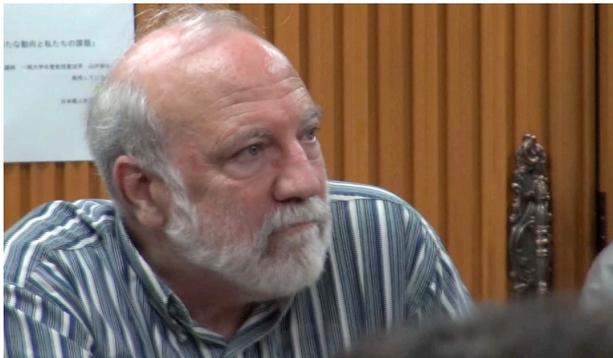
憲法を変えた方が良いとか、変えない方が良いとか言う話は、たまに友達と話題になるが、戦争の悲惨さみたいなものは「良くないよね」と言うことが共通にあっても、どう良くないのか、何が良くないのかははっきりさせない。(だから)憲法9条の話になっても「やはり攻めてこられたら勝てないから憲法をちょっと変えてもいいじゃない」というような話になってしまう。今日の映画を見ると「まず憲法を守るのがスジでしょう」とそこから話を進めていかななくてはならないという思いにたつて今回もそれを強められた感じがする。

●【憲法の問題、日本が試されている】

9条は素晴らしいし、絶対に護っていききたい。7月の参議院選挙はいろいろな意味で今の日本が試されている。日本国憲法を変えてしまおうという動きとともにTPPもとんでもない化け物で、国をぶちこわしてしまうものだ。原発事故、被爆の問題はどうなっているのか？このまま参議院選挙で自民党はじめ改憲勢力が集まって政権ができてしまうとこれらの問題がすべて悪い方へ行ってしまいう気がして何とかできないかとブログに書いたり、いろんな会で話をしたりしている。真剣に一人一人が考えていかなきゃならない、自分の生活に関わっていることとしてこうした発言を拡げたいと思う。この映画を見て(これまで)自分が憲法を観る視点は日本からの視点だったこと、海外からの視点で見ることはすごく新鮮だった。勉強不足で知らないことが多かったことを反省している。

○【見るたびに力がわいてくる映画】

ユンカーマンさんありがとうございました。この映画を見るのは2005年当時と2回目だが、その時は高校生を連れて行ったので「分かるかな」ということに気をとられてしまった。きょうは言葉が全部入ってきて涙が出た。見るたびに力がわいてくる映画だと思う。この会のことを朝鮮人学校や中華学校の人にパンフレットを送って紹介したい。またこの1週間分の憲法改悪に関する新聞記事を切り抜き、まとめてきた。映画は素晴らしく心に響いた。



○【ベアテ・さんが人権と福祉を憲法に入れた】

映画を見てふたつのことで感動した。

一つはベアテ・シロタさんが憲法の人権の問題や福祉の問題に関わっていたことは知っていたが、きょう映像を通して女性の権利の問題、福祉の文言を入れたのが彼女だと言うことをご本人の口から聞いたことに非常に感動した。社会福祉の仕事をしているが、やはり今生活保護の問題や精神障害者の医療保護の問題など改悪が進められている。今度参議院選挙で自民党が大勝してしまったら福祉というベアテさんが憲法に入れて、育ててきたものがごとく壊されるのが明らかだ。自分自身福祉の仕事の中で働いていく上で難しくなると考えていたが、ベアテさんの遺言と思って自分の生き方を変えていかなければいけないと思った。

【憲法9条は神様が人類にくれた宝物】

もう一つ感動したのは、韓国のジャーナリストが「憲法9条は神様が人類にくれた宝物だ」と言っていたこと。私も9条だけで無く日本国憲法全体が宝物だと思っていたが、韓国の方、アジアの方の口から「宝物だ」と聞くことができ世界の歴史の中で日本が与えられた大事な、大事なものと言うことを実感した。それを守っていくことは自分の存在を賭けてやっていかなければならないことだと感じた。ありがとうございました。

○【女性の人権、慰安婦の問題から】

この7年間、日本の女性の人権問題とくに慰安婦の問題に関わってきた。政権が変わっても変わらない、とくに民主党政権になってよけい国会で法律として取り上げられない状況でいらしている。1回目と今回映画を見て、良い企画だと思うが人が少ない。でも一人でも頑張ることが力になっていくと思った。

○【自分が変わったことにびっくりしている】

今までは憲法の話など興味が無かったが、安倍政権の話を知っていると怪しくなってきたなと思った。自分たち戦争を体験した人間が一生懸命みんなに説明する、そういうことをしなければいけないのではないかと思い、前回から参加した。看護師の仕事をしているので福祉の問題も切り捨てられていると感じている。まわりの人々は憲法の問題は特殊な人の考えることと考えているようだ。案内チラシに「(映画会のことを)あまり広められなかった」とあったので、こんなことをしたのははじめてだがそれを別の集まりに持って行って、持ち帰ってもらった。自分が変わったことにびっくりしている。

第3回憲法を考える映画の会(6月15日)の映画の後の話し合い その2

○【自分の力の無さを認めればちょうどいい】

昔から芝居をやって演出家になろうとしていたのだが、そうした観点からこの映画を見ると「日本人は自殺しがっている」という風に見ることができる。せっかく良いものを持っているのに値打ちを知らず捨ててしまおうとしている。それを捨てたとたんにみんなから責められ奮戦して討ち死にして行く。周囲の国々から攻められ戦いながら「過去に戦争はしない」と言っていたステータスに戻りたいと思うけれども戻れなくて結局は死んでいく。と。風土自体も地震とかいろいろあるので、気がつけば戦争をしているヒマも力も無いのだ。チョムスキーさんも言っておられたが「自分の力のなさを認めれば、ちょうどいい」のだと思う。

戦争をしないという憲法のおかげで、他から憎まれていたのが棚上げにしてもらって、後はこの島で、この環境で生きていだけで精一杯なのだと言うこと。そのことを認めるのが怖いのでごまかして暴れながら死んでいくという筋書きになる。

(安倍さんは)岸信介の孫で、反省しないばかりか、おじいさんの夢をまだ追っている。その夢に討ち死にするのだが、よく考えないと私たちはみんな連れて行かれてしまう。この映画はそう見えました。自殺しようとしている民族が忠告を受けているという状態だと。

○【男たちに任せておくとヤバイ】

男たちに任せておくとヤバイという気持ちを強く持っている。戦前、国策に抗することのできなかつた女たちが悲しい思いをしていた。次の女たちは憲法を持っているのに何をしていたんだ、と言われる。男女共同参画の社会なんて何をやっていたんだ。女の出番、男たちに任せておいてはいかん。クォーター制にしても女性たちが本気になって男性と向き合っていないと、女たちが次世代の「いのち」のことを考えてやらないと市川さんはじめ戦前に闘って権利をかちとった戦前の女たちに申し訳ないという気持ちがします。

○【教育の現場で締め付けが厳しく】

新聞を読んでいても毎日が息苦しい感じで過ごしている。どうしたらいいのか、どうすればいいのかと考えるが具体的にできなくて自己嫌悪の状態になる。小学校の教師をしてきたが、子どもたちにしっかり伝えてこなかったことを反省している。『日本国憲法』の本を使って社会科の授業をしていたが、この10年位は締め付けが厳しくそうした授業もできなくなっていて、職員会議などでも何も発言できなくなっている。

【考える暇も無い若い人たち】

身近な人、若い人、知らない人達にこの映画を見て欲しいなと思った。この間街頭演説で「9条を守りましょう」と言っていたが、9条と言われてどれだけの方が戦争を放棄している条文だと分かっているんだろうかと思った。具体的に言わなきゃ分からない。憲法なんて言っても遠いものだしピンと来ない若い人が大勢いる。娘を見ていると仕事に忙しすぎて疲れ果てている。考える暇も無いし、本を読む暇も無い。そういう若い人にどうやってこの映画に来るように言えるのか。この映画を見せるにはどうしたらいいのかなあと考えながら見ていました。

●【相手がほっとするように伝えることが大事だ】

映画を見て、ユンカーマンさんの問題意識や学者の先生たちの話は難しい話だけれどユーモアを交えてわかりやすく伝えていることがわかった。難しい話を伝えるときには相手がほっとするように伝えることが大事だと感じた。私は1955年生まれで、中学校高校生の時に社会の問題を考えるときに手がかりになるのは憲法だと言うことに気づいた。いろいろな専門性やしくみがあるんな問題が起こってくる、違憲判決がでてどこを基準にどうなるのが基準として決まる。だから憲法はものを考えるときのベースになっている。

ある集会で伊藤真さんの話を聞く機会があったが、伊藤さんが最も強調したのは、「自分のことかどうか」と言うことだった。私も子どもがいるがなかなか聞く耳を持っていないのは、自分の問題だと思っていないと言うことだろう。何で憲法についてそう思っているのか、なんで大事だと思っているのか、関わり方とか、今までの考え方も含めているんな機会にあきらめないで言っていくしか無いと思っている。

●【この2ヶ月の中で随分変わってきている】

第1回憲法を考える映画の会があった4月6日の時点ではまだ世の中切迫感を感じていなかったように思うが、5月、6月、はじめて自民党の憲法草案を見てこれはもう戦前の憲法そのものじゃないかという印象をもった。世の中ではあまり問題になっていないような印象だったが、自民党の中でもいやそれはまずいよ、と言う意見も出て2ヶ月の中で随分変わってきているかと思う。一人一人が憲法どうしようと考え始めているのではないか？

【憲法の外国からの評価が新鮮】

きょうの映画は外国から見た日本、日本の平和憲法がこれだけ外国から評価されていることに大変新鮮な感じがした。我々は憲法9条を世界にめざしていくと言うことを日本人の使命と感じたのでは無いか。

第3回憲法を考える映画の会(6月15日)の映画の後の話し合い その3

アメリカが世界に700もの基地を持つ帝国主義だと言うこと、(日本は)基地は持っていないくても、経済的な意味で世界が無くては生きていけない国になっていること、せめて武器を持って外に出て行かないことから始めないと大変な時代になる。

【戦争に入っていく時代の空気】

15年戦争と言われるが、その時代の空気はなかなかわからない。もしかしたら、1930年頃の何となく暗くて戦争への道を突き進んだ時代と同じような空気が今の時代にあるのではないかと言う危機感を感じる。「絶対に戦争なんてしたくない」と思いながら、後で考えると2013年から悪い方向に行ったとしたら、「あの時もう少し頑張れば良かった」と言う気持ちになるかもしれない。それを考えていかなくてはならない。大変すばらしい映画でありがとうございました。

●【日本国憲法は人類の英知が作った】

韓国の方が「神様が人類に与えた宝物」って良い言葉だなあと思って聞いた。以前ベアテ・シロタ・ゴードンさんを描いた『真珠の首飾り』という芝居を描いたジェームス三木さんに話を聞いた。「良く押しつけ憲法って言われるけど、日本国憲法とくに9条は占領軍やGHQが作ったわけではない、人類の英知が作った」と。憲法に関心を持ってコスタリカや、ドイツに行ったり調べ考えたりしたがその通りだという気がする。第一次世界大戦が終わるときにアメリカのレビンソンさんという人が、Outlawry of war(戦争違法化)という考えを提唱して、それがアメリカ中に広がった。それは『戦争をやる者は必ず自衛のためだと弁解する。だから自衛のための戦争も含め、すべて戦争自体を悪とするべきだ』という考え方で、それが20世紀の不戦条約や国連憲章に一部流れ込んできている。さらに、Outlawry of warを体現したのが日本国憲法



だ。安保条約とは矛盾しているけれども、日本国民がそうした知恵をもって60年もとにかく殺さない、生かしておく、これを課題にしようとするまでやっている、これはすごいことだ。きょうの映画を見て、いろんな国の人が同じように見ている人間どうしなのだから当たり前なのだが、同じように考えてくれる人がいっぱいいると思い、大変力づけられた。

●【イラク戦争での憲法の形骸化】

映画を見て感銘を受けました。いちばん興味深く感じたのはイラク戦争の自衛隊派遣のこと。アメリカが戦争を仕掛けた理由の大量破壊兵器、それが無かったのにそれに賛成してしまった日本の責任問題が問われていない。その時に小泉氏が「憲法改正しなくてもいいのでは無いか」と憲法を改正せずに解釈だけ変えてイラクに自衛隊を派遣してしまったこと。それがパレスチナやアラブの人達に悪い感情を与えて、外交的にも大失敗であったことなど。今、憲法改正が言われているが2004年の段階で、なし崩しに、形骸化されていった。沖縄の人が「不断的な努力で憲法を分からなきや行けない」と言われていたが、不断的な努力ばかりか、ずるずると少しずつ憲法の中味が失われていった感じがします。とくにイラク戦争のところ。

○【憲法改正問題は国際問題という視点】

今まで憲法の問題は、自分とか自分の子どもたちやまわりの人とかに戦争で死んで欲しくない戦争に行きたくない、相手の国の人を殺す人間になって欲しくないというのがいちばんの大きな思いだった。きょうの映画の中で憲法改正問題を国内問題にしては行かなくて国際問題にしていかなければならないというのが新しい提起として思った。

【政府に憲法を押しつけたのは国民】

憲法を作る経過についていろいろなことが言われるが、政府がこの憲法を押しつけたのは占領軍と国民であるとみるととてもわかりやすい。いろいろな経過の中で憲法を変えずに来たというのが国民の意思だと言うことが分かってきた。今憲法9条を改正するために96条を、96条を改正する前に小選挙区制があって、そこですら一票の重みの格差がひどい、そうした中で参議院選挙を迎えようとしている。その前にこういうことをやって、本質を見極め、いろんなことに広がっていくことが、大切だと思いますし私も頑張らなければと思います。

○【大事なものは大事にしていかなければならない】

この映画はいろいろなところで上映してくれるので何回も見ている。映画の後にみなさんのお話を聞いて、それで安心しちやいけないうけども、やはり日本にとって大事なものをきちんと守り育てていくために若い方に声をかけて来ていただくようにしなければと思います。ほんととは誰かお連れしなかったのですが、なかなかそこが難しいところ。心新たに大事なものは大事にしていかなければならないと思います。

第3回憲法を考える映画の会(6月15日)の映画の後の話し合い その4

○【自分が一歩前に進んでいくことを覚悟した】

自分はどうか、と言うことを考えさせられ、一回ごと強い気持ちが出てくる、「負けないぞ」という気持ちにならせる会というのはなかなか無い。街頭でいくら叫んでもみんなが立ち止まるわけでは無い、日本ってこんな国だったかな、とも思うが、きょう、のいろいろな方の発言や映像の中でお話になった各国の専門家の方のご意見に自分が一歩前に進んで、行くことを覚悟した。

出席者は土曜日と言うこともあって少なく感じたが、お話しされる方が残って話しておられるのを見て「やれるな」という感じを今日はもった。会の進行のあり方だが、「今、ここまで来てますよ」と言った案内は是非続けて欲しい。「今、この辺まで来ました、これからこうなんです」という、山場が次にあるという誘いの仕方は是非やって欲しい。自分に与えられる知識とかやる気とか、次はもっとすごいぞと期待させるものを。それがいいことだと思っても参加できない人もいるので、少しでも明るい、やる気を出してもらおう情報をこうした輪の中に出してもらおうと来る人が増える。聞いたら黙っていないから誰かにしゃべる、これが大事なことと思う。資料もとてもためになります。

ただ、マイクの音量をもう少し上げて聞こえるようにして欲しい。分からないことがあったり、聞きそびれてしまうと、その後から渋ってしまふ。大事なことを聞き漏らしてはいけないという不安もある。今日お話のあった学者や運動家とかなるべくそれらが正確に伝わるように、私よりもっと高齢の方もいらっしやるように思います。私も一生懸命やります。

○【憲法を変えて戦争をできるようにするように企んでいる人はひとりとして前線に立たない】

昭和21年の5月生まれの戦後世代です。戦争中多くの日本人が命を落とし、海外で多くの人々の命を奪って、国も大きく損失を受け海外にも多くの迷惑をかけた。その反省に立って憲法が生まれ憲法9条とか、日本は戦争をしない国と決めて戦後70年近く戦争をしないできた。その素晴らしい憲法を安倍首相はじめとする同調者たちが改正しようとしていることに危惧し、恐ろしいことだと思う。

また政治家とか、公務員とかは権力にいる人達は憲法を守らなければいけない、実行しなければいけないという立場にありながら、おろそかにしてきた。自衛隊が生まれ、軍隊では無い、自衛隊だと詭弁を言い、安倍首相も外国に行って「自衛隊は軍隊で無いから」とか自衛隊が矛盾を含んでいることを当たり前のように言って憲法をそれに合わせるべきだと言う。全く逆であって、今の憲法を如何に誠実に守ってきたかあなたたちの責任こそ問われることでは無いかと思う。若い人達に言いたいのは、自衛隊に入って銃砲担いでいくのはあなた方達だと言うこと、20代30代の人達、10代の人でも何年かたてば軍隊に引っ張られる。殺し合ったり、殺されたりするのは若い人であって、憲法を変えて戦争をできるようにするように企んでいる人はひとりとして前線に立たない。安倍首相に限らず政府の人間や高官も官僚も自分たちは前線に立つことはないわけで、若い人にそのことを十分に注意して欲しいと思う。

安部晋三のおじいさんの岸信介という人、岸信介の本を読んでいくと、今の安部晋三がやろうとしていることが見えてく

る。参議院選挙で自民党が勝って、思うように憲法を改正してその通りになったときに、あの時に言ったのはこういうことなんだな、と後悔しても遅いのではないかな。個人的なことだが、5ヶ月になる孫がいる。今、孫を見ると戦後のものの無い時代に苦労して育ててくれた両親のことを思う。一生懸命働いてきて今日になってまた戦争やろうなんてとんでもないことだ。憲法を大事に守っていかねばならないと思います。2回目ですが、大変いい映画があります。

○【私が戦争のイメージをもった時】

どうすればこれを若い人に見てもらおう機会がもてるかということをやや考えながら映画を見た。

最初に戦争のイメージが持てないという話があった。私の父は学徒動員で戦争に行っている。知識人でも無いので多くの人同様に戦争のことをほとんどしゃべっていない。父が亡くなる前に痴呆になって、その時の妄想が戦争中の恐ろしい体験をもとにしていた。父は軍国青年であったのだが、これだけ人間のトラウマとして残る、復員して再び戦争に行くと言うことはすごい怖いことと青年の記憶に残っている。それが戦争というものが私の中に入ってきた時だった。もう一つ高校生の時、反戦運動が盛んで、その時に出会った本に生井英考の『ジャングル・クルーズにうってつけの日』(筑摩書房)と言う本があった。帰還兵の体験談だが、その中に自分と同じ年に生まれた人達の体験談が出てきた。自分たちは高校生で反戦だとかそれに近いことをやっているが、彼らは戦ってこんな目に遭っているのか、具体的に描かれているのを読んで、自分たちが如何に(戦争というものへの)イメージが貧困かということを感じ知らされた。自分は小学校とか中学校とかでは憲法についてあまり教えられなかったが、憲法の精神とかを当時に先生方はすごい熱意と実感をもって教えていたんだと感じている。その後の私たちの世代は何をしていたのだろうかと考えてしまふ。今日は女性の先輩方が多くいらっしやいます。先輩方に感謝するとともに、私たちはどうかしらと思つてます。



第3回憲法を考える映画の会(6月15日)の映画の後の話し合い その5

■ジャン・ユンカーマンさんのお話(2) (はじめのお話、まとめのお話は2ページ目に掲載しています)

●【憲法は民主主義のハート】

この映画を作っていく中で、僕は、ものすごく勉強になった。一つが、考えてみればあたりまえだが、憲法というものが、民主主義のハートなのですね。民主主義の中心のところなのです。あまり憲法というものが硬いものとか、生きているとかあまり感じないことが多いですけど、そういう意味で民主主義のハートなんだということなのです。

ジョン・ダワー先生の話のなかで、ずーっと戦後を通して政府が憲法を否定しているなかで、日本の国民が憲法を守ってきたということ。それを支持してきたということで、やはり国家と民衆、国家と市民という別々のものなんだということで、そういうやり取りをずっとやり続けてきたということなのです。

そのなかで憲法があるということで、そういう意味では、国家は絶えず国家の権力を増やそうとするんです。それに対して市民、民主主義の機関、新聞、メディア、いろんな文化、大学、学校、市民の力を市民の権力を増やそうとするので、絶えずそれ(憲法)をコンプレート(完成する・仕上げる)しつつあるんだということなんです。

だからこの映画をつくった時にまたダワー先生からのヒントを受けて、映画のなかの構成のなかで、そういうような場面を何回も繰り返して出した。プロローグにそういうものを出して最後のシーンもやはりデモ隊で終わるとそういうようなところを強調したということでもあったんです。

憲法というものは、そういうものなんだということを伝えなかったということなんです。それがまたこういうような勉強会とかいろんな集まりで、人達が集まって、その憲法を考えるという行動がまさにそういうそのものなんだと思う。

この映画は、2005年だから8年前にできたものなんですけどあの当時は、特に全国的に何百回もそういう集まりがあって、いろんな人に見てもらったんですけど、この映画だけじゃなくて僕の映画、シリーズで見る映画とか講演会とかそういうことがあって、伊藤真先生とかいろんな人の講演があって、そういう意味では、ものすごく憲法に対しての意識、知識が高くなってひろがったということなんです。

●【映画ができた8年前と今の状況】

2005年から3、4年の間に全国的にティーチ・インという形で大勢の人達が憲法のこと、その知識がすごく高くなったと思うんです。

今はまだ憲法改正というねりや動きがあるんですけど、まだ8年前のときの教育、話し合いという意識が高まったことの影響が残ってるんだと思うんです。

簡単に憲法を改正することができないと思うのです。もちろん恐いところもあるんですよ。今度の選挙で多分自民党が圧勝することもあるんで、その勢いでいろんなことをやろうとすること。選挙以前にもいろんなことをやろうとしてるんで、やろうとしているだけじゃなくてやってるんですけど、でも簡単に憲法を改正することはできないんじゃないかなと思うんです。

●【戦争は始めるのは簡単、終わらせるのがすごく大変】

もう一つは、最近のとくに自民党になって戦争に対しての発言とか、侵略定義とか慰安婦とかいろんな話を聞くと思うのは、一つには戦争を始めるのは、すごく簡単にできるものだという事です。

とくにアメリカの経験で見るとイラク戦争、アフガン戦争というのが本当に必要ない戦争、無駄な戦争なんですけど、それでも150万人のアメリカの若い人達はその戦争に関わってきたのです。全然意味のない戦争なんですよ。それが、政府がテロの事件があったことに対して煽って「敵がいる、敵がいる。」というような敵をつくって、で戦争を選んだ。必要ないのに戦争に行ったんです。それをアメリカの国民は、みんな賛成したんですよ。そして「やるやる」「やるしかないんだ」というようなことに決めたのですよ。

戦争は簡単に始まるものなのです。日本のように憲法9条のような歯止めが無ければ、そういう戦争は、すぐに始まるということができるんです。

だけど戦争を終わらせるのは、ものすごく大変なんです。イラク戦争が無駄な戦争、必要の無い戦争というのが6か月位たった所ではっきりと世界中の人達が、それがわかっていたんだけど、それでも10年も続いたんですよ。なかなか終わらせることができない。

●【終わることの無い戦争】

150万人のアメリカ兵士が戦争に行き、その半分以上が今、病院に通っている。86万人くらいが帰還兵の病院に通っている。PTSDは、本当に恐ろしいものなんですよ。そういう意味で戦争が終わらないでずっと続いている。PTSDになってアメリカに帰ってくると仕事ができなくなっちゃうわけなんですよ。仕事ができなくなって失業して、家族も崩れてしまう。離婚してしまう。そして自殺する。自殺率がものすごく高くなっているんです。帰還兵の自殺、80分に一人が自殺してるんですよ。1日に18人、1か月500人、1年間6000人の人が自殺してるんですよ。だから戦争でなくて死んだ数が戦争で死んだ数を上回るということになってしまうんです。それがずっと続くんです。で、今の戦争があって、それでその影響でベトナム戦争からのPTSDを抱えている人達がまたPTSDの症状がでてきているんです。

昨年から沖縄の米軍基地の映画をつくっているんですけど、最近聞いた話だけど、沖縄戦を経験してきたおばあさん達が今になってPTSDの症状が出てきているんです。というのが、戦争終わった時に子どもがいたりして忙しくていたんで、その記憶を全部埋めていたんです。で、歳になってきて子ども達がみんな家を出て行って、誰もいなくなり暇になったところで、戦争中の経験がまた湧いてくる、またPTSDの症状が出てくるんです。戦争は、終わらないんですよ。沖縄戦からもう70年近くもたっているのにそういうことがまだ続いているんです。(この続きは8ページへ)

憲法を考える映画の会の リストを作ります

- 映画を見て、社会や政治の問題を考え、話し合っていくことができるような「いろいろ考える映画のリスト」を作りたいと思います。
- 憲法そのものの問題だけでなく、原発の問題や、沖縄、安保、人権、核、福祉、医療、市民運動、アジアはじめ国際政治の問題なども社会は生活、生命に関わるすべての問題が憲法に関わる問題であるということが、この「映画の会」を通して分かってきました。
- そうしたさまざまな問題に取り組んで、現在と未来を見つめる上でも、私たちにいろいろなことを考えさせてくれる映画を探し、集めて活用していきたいと思います。
- 最近できた映画でも、随分前に見た映画でも結構です。これまでみなさんが見たことのある、あるいは聞いた、知っている映画でこうしたさまざまな問題について考え、みんなで話し合えるような映画をご紹介いただけませんか？
- リストをつくってどこに行けばそれらの映画を見ることができるか、活用できるかを調べ、どこでも、誰でも「映画と話し合いの会」ができるような、作りたくなるようなリストにします。
- 同じようなことをめざしている他の会や団体にも紹介し、活用していただき、あちこちで「考える会」ができるようにします。

■憲法を考える映画の会のこれから

- 私たちは、第1期としてこれまで4回の「映画の会」を開いてきました。現在、6回目以降の映画の会をどのようにするか話し合っています。ご意見をお聞かせください。

また同じような「映画の会」をひらこうとしているみなさんにも、DVDの提供・案内など お手伝いしていきます。

お気軽にお声をかけてください。

■憲法を考える映画の会プログラム 9月

第6回 9月14日 映画 ベアテの贈りもの

ユンカーマンさんの話(3)

(7 ページ目からの続き)

■ 編集後記

- 【もうひとつの意味での「戦争が終わらない」】
そういう意味で戦争が終わらないということがあるんだけど、もう一つの意味で戦争が終わらない。
というのは、安部政権とか安部のまわりにいる人達がまだあの15年戦争を正当化しようとしているんですね。
戦争に負けたことを認めたくないんですね。本当にあの戦争は、負けるべき戦争だったんです。負けるべき戦争で終わった後に反省し、平和憲法をつくったということが立派な歴史を認めるという行動だということなんです。
自分が過ちを認めて過ちを繰り返さないということを誓おうということが本当に立派なことなんです。
政治的なモラル的な糧なんだということなんです。全然屈辱的なことでないし、恥ずかしいことでもないし、それを否定する理由が一つもないんです。
ただ今あの連中が、「これは占領憲法だということで縛られてる」というような言い方をします。というのは、その戦争を逆に正当化するということが侵略がどういう意味をもっているのか、あれは、本当に侵略戦争ではなかったという防衛のための自衛のための戦争だったというようなこと。
70年戦争が始まってから80何年もたつてるところでまた正当化しようとするところで、戦争はなかなか終わらないんじゃないかという気がします。
だからそういう意味でそういう影響、軍隊の影響力とか軍事主義という影響力ですね。すごくなかなかそこから逃げるとか抜けるということが、とても難しいことだと感じています。
(この続きは2ページへ)

- 第3回の憲法を考える映画の会は出席者のみなさん全員からお話を聞くことができ、とても充実した会になりました。加えてジャン・ユンカーマンさんにお話いただいたことは、私たちがこうした会を続けて行こうとしていく上でも、その意味を明らかにし、励まされる内容でした。
- そうしたわけで原稿もいっぱいになってしまっていて、今回の経過報告や会計報告は次号にまとめさせていただきます。
- 例によって、みなさんの発言の見出しや強調表現などは編集者に判断でつけさせていただいております。おそらく発言内容が違っていたりすることもあるかと思いますが、そうしたことも含めてご意見をお寄せくださいますようお願いいたします。みなさんのご意見やご返信が励みになります。

主催：戦争を考える映画の会

〒185-0024
東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL : 042-406-0502
E-mail : hanasaki33@me.com
検索 ➡ 憲法を考える映画の会